

Title	からだから遠く : からだトーク2014
Author(s)	本間, 直樹; 佐久間, 新; 菊竹, 智之
Citation	Communication-Design. 13 P.23-P.47
Issue Date	2015-09-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/53841
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

からだから遠く

—からだトーク 2014—

佐久間新 (ジャワ舞踊)

本間直樹 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD)

菊竹智之 (大阪大学文学部)

Ex-centrifugal Body

Shin Sakuma (Javanese Dancer)

Naoki Homma (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

Tomoyuki Kikutake (Faculty of Letters, Osaka University)

キーワード

ダンス、即興、身体、遊び

dance, improvisation, body, play

1. イントロダクション

本間 (以下H) 「からだトーク」は2007年のオレンジカフェからスタートしました。この名称は、からだ語りかけてくる声に耳をすます、という意味でつけられました。これまでも、からだトークに関する報告や研究ノートをいくつか発表してきましたが、今回の研究ノートでは、新しい考察と発表のかたちを模索するために、対話篇というスタイルをとりたいたと思います。ここ数年は、水、煙、風、音といった現象を追う動きから生まれるダンス、さらには皿や棒という道具を使ってからだを動かすことから始まるダンス、という試行を重ねてきました。佐久間さん、今年はいかがでしたか？

佐久間 (以下S) 今年はこんなことを最初に書きました。

これまでの「からだトーク」では、水や煙や火や花とからだとの出会いからさまざまなことばとよい動きが生まれました。

布や棒や食器にからだを沿わせることから思わずからだ動きはじめるのを発見しました。

決められた振り付けや順番を覚えたり、みんなでそろえることが無くてもたくさんのいい動きやダンスらしきものがうまれてきました。

「からだトーク」でうまれてきたいいい動きやダンスらしきものは、果たしてダンスなんでしょうか、作品なんでしょうか、あるいはダンス作品なのでしょうか。しかし、もしかしたら、ダンスや作品になることでこぼれ落ちてしまういい動きや踊りたいという衝動もあると思うのです。

これまでやって来たことをもう一度辿りながら、即興と作品、日常とダンス、作為と無作為などの境界を綱渡りしながら、ダンス作品の可能性にチャレンジしたいと思います。

毎回、作為と無作為、即興と作品、ダンスと日常の動きなどについて思いめぐらしながら次のテーマを考えていきました。揺れるというテーマからスタートしたんですが、テーマ自体も少し揺らいでいるようにもみえます。ラインナップはこうです。

- 6/26 揺れることと音
- 7/18 植物に近い人間と動物に近い植物とのダンス
- 8/23 音に動かされる鈴人間と動く音が鳴ってしまう人間風鈴
- 10/23 シーズー バランスが取れる瞬間と崩れる瞬間
- 11/22 光と影 こちら側とあちら側
- 1/30 ブランコ 静止と動き 動きの中の静止
- 2/27 ヒモ つながっていること 操ること操られること
- 3/27 まとめ

「からだトーク」はひらかれた集まりなので、続けて来られる方もいますが、毎回いろんな方が参加します。それでも、何年も続けているうちに何か層になって積み重なってきた場の力のようなものがうまれてきたように思います。非常に微細で見えにくい、聞こえにくい、感じ取りにくいものを感じ取っていく。それを自分のなかで味わい尽くす。周りの人や環境と響かせあう。そういったことがオレンジ色の部屋のあちらこちらで起こるようになってきた。ここであまれたダンスの芽が、部屋やキャンパスを越えて伸びていくような気がしています。

H 自分のなかで味わいつくす、周りの人や環境と響かせあう、ですか。ただ没入するのではなく、自分の内側と外側とが響きあっていく感覚を探していくと、おのずとパフォーマンスが生まれていく、ということでしょうか。

2. 作為と無作為のあいだ

H 即興表現を追求するという狙いもあって、今年は相談して「作為と無作為」をキーワードにしたのですが、佐久間さんの方からアイデアがどんどん出てきて、毎回、「今回はこれでいきます」と、謎めいたスケッチが私に送られてきました。鈴をぶら下げた人の絵とか。(図1) それ割といい感じの絵で。さっそくウェブサイト上の告知で使わせてもらいました。今年はなんか今までと違う印象がありましたね。



図1 鈴人間と人間風鈴



図2 揺れる

S 第1回の「揺れる」の時にも自分の手帳に絵を描いてるんですよ。(図2) 揺れるときにどうやって揺れるかなとか、揺れるのがどう見えるかなとか、何人もでやるんだったら、つながってみて、例えばそこに布がかかっているとしたら、モゾモゾとミミズみたいに見えるんじゃないだろうとか想像しながら。今年始める前に、振り付け、いわゆる決まった振り付けから始めるダンスではないけれども、動きが始まるようなアイデアを出して、それで、参加者が動くことができないかと考えていたんです。以前のからだトークでは、その場だけの動きだったんです。煙とか、水でしたときは、発表のことはあまり考えてなかったんです。今回は同じようなテーマなんだけど、人に見られる可能性も考えてみようかなと思って。

それで、絵を描いてみたんですね。どういう風に見えるだろうっていうのを意識して。鈴人間のときに、描いて送った絵を載せてくれて、パソコン上であらためて自分で見ても面白かった。別に僕は絵が得意でもなんでもない。メモみたいに書いた絵が載って、割と面白

がってくれる人がいて、これは面白いなと思ったので、もう一回描いてみようかなという感じで、以後何回か描きました。

人間風鈴というのは、人間が風鈴になるアイデアです。周りに鐘みたいなのがあって、その真ん中に人間がぶら下がっている。お寺の鐘楼の真ん中に、ペロみたいに人間がぶら下がって、風が吹くと人間が鐘に当たって鳴る。ほぼ自分の意志ではどうしようもない。逆に小さな鈴をからだ中につけまくとどうなるかというのが鈴人間。からだ中に鈴をつけまくなって、それで音を鳴らそうと思って動きまくとどうなるのか。大きい鈴と小さい鈴、風にまかせるのと動きまくのと、すごく対称的なんだけどどこかつながってるみたいな。そういうのが、絵に描いた方がわかりやすいかなと思って、描いてみたんです。

H 実際、やってみてその対比はどうだったんですか？

S 対比はね、そんなにうまくいかなかったんです、その日は。確か鈴人間から始めたんですが、からだのあちこちに鈴をつけて動いてみようとしたときに、今年は作品というか人に見せる可能性を考える、というのが僕の頭にもあったので、完全即興、例えば、これまでのからだトークのときによくやるパターンのように、氷やドライアイスや線香という材料やセットが用意された状態から、思い思いにそこへアプローチしていくというやり方とは同じようにできないなあと思ってたんです。僕の中に、「まとめたい」という欲が出てしまったんです。最初に、一度に全員でやらずに、一人一人やりませんか、ということだけ言ったんです。一人入ってもう一人入って、三人目が入ったら一人抜けるみたいな感じで、同時に鳴らすのは二人だけにしましょうとか言ったんです。鈴の音が結構微妙だから、全員でやってしまうと訳が分からなくなるから、最大人数くらいは決めておいて、出たり入ったりしましょうか、みたいなことを最初に説明したんです。でも、それで場が硬くなったんですね。それでさらに流れが悪くなると、僕が、じゃあスーッと出てください、はいじゃあ次入って、はいはいどうぞというのを、言葉では言わないけれど身振りで、采配するみたいな感じになったんです。すると、どうしても硬くなってしまいうんですね。楽しく音を鳴らすという一番大事なところが抜けてしまった感じがしました。それから外に行って鳴らし始めたら、結構楽しくなったんです。しかもからだだけに付けるんじゃなくて木に付けたり、旗の掲揚台の紐につけてみたり、阪大の中の色んなものに付けたりし出して、ちょっと空気が変わりました。最後の方に人間風鈴をやりました。菊竹さんもいましたよね、どうでした、あの時は？

菊竹（以下K） 鈴人間の時は、最初まず道具が面白かったんです。鈴がいろんなものについて、それが机の上に置かれてたんですけど、たまたまビデオを撮っていたので、誰がど

れを選んでどこにつけるかみたいところが面白かったです。あとは、手袋とか、靴下とかごく普通のものに付けてたのが良かったなと思いました、特別な装置っていうよりは。特別な動きをしたり、音を鳴らそうと頑張らなくても、手袋とかつけてれば普通の動きが音に変わるので、それが楽しかったです。

H 鈴はクリップで付けたんですか？

K ええ、僕は最初髪の毛の先に沢山つけて、普通に歩きました。

S 結構鳴りました？

K 普通に歩いても、あんまり鳴らないです、さすがに。でもしゃがむと、近いので自分には聞こえる。他人には聞こえなかったかもしれないですね。

S あの時、外へ出てから、歩いていると、風が吹いているのとか、木の葉が揺れているのとかがよく感じられるんです。そして、そういった音や遠くのいろいろな人の声が聞こえてくると鈴の音とが交わってくるのが感じられるんです。しかもその鈴の音は、歩いている自分や歩くという行為とつながっているように感じるんですよ。あの辺からちょっと不思議な感じがしてきたかなと思います。

H それはどういう感じなんですか。

S なんかね、一つ一つのいろんな音が、よく聞こえてきたり、鈴以外の周りの音がよく聞こえてきたり、あるいは一つ一つの音に愛着がわいてくるみたいな。聞こえ方が変わってくるという感じ。

H それは普段とは何が変わるんですか。自分の動きが逐一聞こえてくるからなんですか。

S うーん、自分の歩き方もちょっと変わってくる。歩くと、かすかに小さな鈴が鳴る、すると、なんとなく歩いている感じも少し変わってくる。で、うーん。なんやろね、なんか感覚が変わるんやろね。

K なんかに外に出ると不思議な感じで、すごく遠くの鈴の音が聞こえるような気がして。あれはなんででしょうね。部屋のなかだと、本当にちゃんと、しっかり揺れた鈴しか聞こえな

いんですけど、外だと、木の先っちょに付けたのが、ちょっとしか揺れてなくてもすごく遠くまで聞こえた気がしました。

H 面白いですね。たしかに単音を注意して聴くのと、さまざまな空間的な配置のなかで音を感じるというのは耳の働き方やからだのあり方が違ってくるのでしょうか。

S 動きと音でいうと、そもそも鈴人間をやってみようと思ったのは、僕自身が踊る時に音楽とともにやることが多いんですが、例えばガムランだと、もちろんガムランの音楽に合わせて動きますよね。踊りと音楽がすごく密接で、音の感じがすごく踊りに出てるんですよ。踊り自体が音楽の一部、あるいは楽器の全部を合わせたのが踊りみたいに見えたり感じたりすることがあるんです。けれども普段は踊り手は音を鳴らさないですよ。でも、音と共にあるみたいな感じがあるんです。ガムランのとき以外も、動くときに、動きに音を感じるんです。あるいは音をイメージして動くことがあるんです。例えば人間のからだに、なんかこう、鱗とか、ささらとか、そういうものが全身について、グッと手を動かしたりグッと背中を反らせたりすると、そこに音がビジャーっとかグシャとか、ワシワシっとか鳴る感じがあるんですよ。からだの動きの変化にそって音が鳴るようなイメージを持って動くこともあります。それで、実際に、動くことで音が鳴らないかなと思ったわけです。確かからだトークの1回目の時に、動きに応じて音が鳴るってということがありますかという質問をした気がするんです。で、考えてみるとそんなにないんですよ。動きのすごく微妙な変化が音に変わるということが、意外と無いと思ったんです。あの時、何を例に出したのかを忘れたけど、洗濯機の排水ホースみたいなのを回して、ヒューって鳴らす楽器がありますよね。

H 腕でホースを振り回してそのちょっとした変化で音が変わったりする遊びですね。

S インドネシアには、鳩の尻尾に笛をつけて、鳩を飛ばして笛を聞く遊びがあります。鳩がスピードを変えると音に変化するんです。それもいい感じですね。でもあまり無いですね。もしそんな感じで動けたらすごく楽しいんじゃないかなみたいな話をしたんです。それで、家に帰って考えて、鈴をいっぱい付けければいいのかなとか思って、それで鈴人間を思いついたんです。試作品を作って、からだトークの前に自分で付けてやってみたんです。したらめっちゃくちゃ楽しかったんですよ。これは面白いと思って、からだトークのときにいっぱい持って行ったらいいと思ったんです。僕にしては珍しく家でいっぱい準備をしたんです。買い物に行ったり裁縫したりしていっぱい作りました。それで当日は、いつもはしない順番まで決めて、はいどうぞという感じでやったら、自分のイメージほどはみんなが楽しんでくれなかったんですよ。まあその落差もあって、この日の前半は、僕としては、ちょっ

と空回りの感じだったんです。

H ちょっとそこを詳しく聴いていいですか。どういう落差があったんですか？

S 一挙手一投足。手をクッとひねる、足を一步出してカタンとかかたとを着く、そのときに鈴がチャリッと鳴る。あるいは、首をカクッと振った時にシャランと鳴るということを、みんながそんなには楽しんでくれなかったんですね。

H どうだったんですか？ みなさん大雑把だったんですか？

S ちょっと大雑把な感じがしました。初めはちょっと感覚が違うなと思ってたら、それからしばらくして常連の手話ダンスをする三田さんがやってきて、鈴を付けた手袋を手にはめて手話をやりだした。そしたらまあすごくシャラシャラ鳴るわけですよ。彼女も嬉々としてやってるんです。でも全身は動かさずに、手袋のところだけですごくやってるんです。その時、僕は、手でやったら鳴るけれど、もうちょっといろんなところでやって欲しいなあとと思ってました。でも彼女があまりにも楽しくしてるもんだから、その感じはいいなと思いながら見てました。途中で彼女がこれはすごくいい、楽しいと言いました。手話っていうのは耳の聞こえない人のためにやるのに、音が聞こえるのが不思議な感じがするんです。音を鳴らすためにやってる訳ではないのに、音が鳴ってるのを楽しんでいる。彼女が楽しんでいる姿は印象的でした。

K 意外と鈴が鳴らないっていうのが確かにあって難しかったのも間違いなくて、意外と鳴らないぞ、みたいな。大きく動けば確実になるのでそうしちゃう。振りすぎると中の玉が一緒に動いて鳴らないし、微妙過ぎても鳴らないし。

S ちょっとだけ裏切らないと鳴らないよね。

K それが意外とできないんです。

S まあだから最初は仕方ないのよ。そんなにすぐにパッとできないのよ。まあそれは僕も分からなかった、そんなにすぐにパッとできないっていうのは。

H それも面白い事実ですね。やっぱり日々ダンスをしている人はからだの使い方、感じ方が違うということでしょうか。動くことそのものを日々楽しんでいるのかもしれない。

K 佐久間さんが途中で、ジャワ舞踊を鈴をつけて踊ってみたじゃないですか。あのときすごくよく鳴ってたんですけど、あれは普通に踊ってるんですか？

S あれは、普通にジャワ舞踊の決められた踊りを黙々と踊っているからだに鈴をつけてみたわけです。そうすると鈴を鳴らそうという動きはしていないにも関わらず、まあ鈴は鳴る。しかも割とよく鳴る。でもよく鳴り出すと、鳴らそう、鳴らしたいという欲みたいなのが、からだに湧いてくる。でもそうしてはいけない、みたいなせめぎ合いを楽しみながら踊ったんです。それは今年始めた時に見たビデオにある、アートエリアB1でやったときの揺れながら振れる手の先のばちがガムランを叩いて微かになるっていうやつ、その手が少し楽器を追いかけしてしまうことと似ているんです。ほんとは当たるのにまかせておけばいいのに、ちょっと手が楽器を探しに行くところが面白いんです。本当の風鈴と人間は違うわけです。それで、あの回に僕がわがままを言って、どうしても試してみたいからやらせてくれと言ってやったんです。ジャワ舞踊に没頭しながらも音が鳴ってくると少し音を鳴らしたくなるからだがうまれるんです。それを抑えつつ踊って行く、その引き裂かれそうになるからだを楽しみながら踊る、そんな感じでしたあのときは。

H 人間風鈴の方はどうでしたか。

S 人間風鈴の方は、絵に描いたのだと、大きな釣鐘から人間が真ん中にぶら下がっているんだけど、それはなかなかできない、大掛かりだから。ちょっと別の形の人間風鈴だったんです、ジャワ舞踊のは。鈴を鳴らそうとするんじゃなくて、風に揺らされて音が鳴る感じ。つまり鈴を鳴らそうということを意識せずにひたすら踊るということ、鈴を鳴らすために動くこととは別にやってみたんですね。外から部屋に戻ってから手をぶら下げて、やったりとか、っていうちょっと別の実験、人間風鈴みたいなのをやりましたけども、踊りに鈴をつけるというのもそっち側の、人間風鈴のつもりでやったんですね。

H 一見対極に思えるけども、やはり共通のモチーフがあるんですよね、話を聴いていると。

S そうですね。

H それは何なんでしょう。作為と無作為っていう乱暴な区別ではないと思うんです。鈴をつける方は作為で、人間風鈴の方は風に揺れるにまかせて、むしろ人間がモノみたいになる、だから無作為みたいな。でもそんなことではないですよね。

S そうですね。作為と無作為っていうのは取りあえず付けてみたというか、付いてる題だけれども、そんなに簡単に分かっこともできないし、その間を行ったり来たりしている感じがあるのかな。どういう感じかな。

ちょっと話は飛んじゃうかもしれないけれど、2、3週間前に、別の場所で、寝転がってる人に、とにかく手とか足とか引っ張るので、引っ張られるにまかせて転がっていただきというワークをしました。死体になって、手を引っ張られたらそのままズルズルと床をすべったり、反対側に引っ張られたらからだバタンと返ったりという感じです。ちょっと力が入ってたら、もっと力抜いて、もっと力抜いて、もうほんとにデローンとひっくり返されるがままにしてくださいと言ったりしてました。僕の相手の人もだんだん力が抜けてきたんです。そのとき、からだトークの最初の方に関わってくれた玉地さんが「理学療法で、頭だけを持って、最終的には立たせることもできますよ。」という話を彼がしたのを思い出し、それを一回やってみたいと思ったんです。これを試せるんじゃないかなと思って。その人の頭を持って回転させると、ゴロゴロと結構転がりました。頭の先の方からからだの中心に向かって、上から押していくと背中が丸まるような無理な体勢になり、さらに頭がめり込むような方向で上から押していくとグッと背中が丸まって座りそうになるんだけど、やっぱりなかなか座らないわけですよ。首だけ持ってやらないといけないんだけど、やっぱり首だけじゃできない。それでちょっと足を持ってあぐらみたいな形にして、引いたり、グッと押ししたりしてみましたが、やっぱりなかなかうまくいかないんです。しょうがないので、少しだけずるをして、手をちょっとだけ引っ張ったりして、なんとか体勢を作って、あぐらまで持って行きました。そこから立たせていこうとするんだけど、首だけじゃどうしてもできませんでした。ちょっと手で補助をしてやると、なんとか立つところまで行きました。でも、首だけじゃ無理な感じがしたんです。

で、無理な感じがした時に、僕はその人がちょっと死体になりすぎている、と思った訳です。勝手なんですけど、もうちょっとこちらは助けてほしいと。でもそれは、力を入れて立つということじゃないんです。生きてる人間と死んでる人間とでは、やっぱりちょっと違う感じがあるんです。生きてる人間はつながってる感じがあるんです。手を押しても遠くの足が動いたりとか。死んでる人間は分からないですが、死んでる人間よりは生きてる人間の方がいろんなところがつながってる感じがします。それをもう少し残しておいて欲しいな、そうしたらできるかもしれんのかな、と思いながらその人とワークをした経験が最近ありました。そのことと今の話がつながってるかどうかは分かりませんが、作為無作為といっても、無作為の中に何か作為が残ってるかもしれないし、何かが残っているがゆえに面白くなったりするのもかもしれません。少し違う話だったかもしれませんが、つながった話だと思います。

H 確かに、人間の意志として動かすからだ、思わず動くからだというのは違いますよね。

S 死んでたら反射は起こらないでしょう。だから、無作為といっても、人形とか死体の無作為なからだ、生きてる人間の無作為は違うと思うんです。いわゆる分かりやすい作為とは違う動きをする時があるんです。なんかちょっと奥の方から出てくる…。

H 思わず出したくなる？

S 思わず動いてしまう。

H こう来たらもう立つしかない、みたいな。

S そういうところが面白みかなと。多分その辺が、その後のシーソーの回にもつながって行くのかなという気がするんですよ。

3. 思わず動いてしまうからだ

H ちょっと大雑把に振り返りたいんですけど、最初の揺れる回って何しましたっけ。

S 最初の揺れるは、ビデオを見て、揺れるってことを今年一年間やりたいんですよ、ということ話をしました。並んで揺れてみようと言って、縦に一列に並んでみたり、丸くならしてみたり、僕が台の上に立ってみんなが下にいたりとかっていうのを、単に揺れるだけでやったり、あるいは揺れながら僕がギターとか、アコーディオンを持ちながら揺れて音を鳴らして、その音とともに揺れてみたり、本間さんが楽器を弾くのを聴きながら揺れてみたりとか、幾つかの種類のをやったんです。

H その次は、植物、ゴーヤとか。

S ツル植物ですね。揺れるをやった後に、作為と無作為がテーマになったんだけど、さっき言ったように、揺れてるんだけどかすかに楽器を追っかけてしまう手みたいなのも面白いですねと話したら、常連のYさんが、うちにゴーヤがあってゴーヤのツルがすごくよく伸びるんですみたいな話を。先に植物がテーマに決まっていて、Yさんがツルが面白いと言うんですが、僕は最初あんまりツルとは思ってなかったんだけど、あ、そうか、ツルも

植物だなと思ってゴーヤのツルも入ったんです。次の回に他にも植物を色々持ってきたんですよ。この回は、巨大な葉っぱを持ってきた人がいたり、他にも植物を持ってきた人がいたり、本間さんも家から鉢植えを持ってきましたね。植物がいっぱい集まったんだけど、ツルが面白かったです、あの時は。ゴーヤのツルが、菊竹さんとFさんの指に巻きつき出したんです。それはすごく面白かった。あれはどういう感じでしたか菊竹さん。巻きついてくると思って近くに指を置いた訳？

K 実際にそうなったらおもしろいなと思って。

S それは予測した？ 短時間だけでも植物が巻きついてくると思った？

K はい。

S で、動いてきた？ それは手に触れる前から分かった？あ、寄ってきたと。

K 植物に毛が生えてるじゃないですか。毛が触れた辺で結構すぐ来たのでびっくりしました。

S すぐ来た？ で、ちょっとずつ巻きついてきた。

K ギュッときて。最初じんわりきて、ある時点で急にギューで動いて、その後またゆるくなるみたいな、リズムがあって。

S どんな感じでした？

K なんか時間の流れ方が、不思議でした。いつもと違う時間の流れ方をしてたんですけど、なんて言ったらいいかな。

S 例えば植物はゆっくり動くと思ってるから、スローモーションの世界に自分が入って行くっていうか、本当は何時間かかけて動いているのを自分は今何秒かの間に何時間を感じるみたいな。

K ちょっと分からないですけど、もうひとつ思い出したのは、力の感じ方も変わってて、本当はいくら強く巻きつかれたからといっても、引いたら指を外せるはずなのに、キュって

されると、本当にそれがすごく強く感じられて、ほんとに捕捉されているみたいな気持ちでしたね。絶対逃れられる力なのに。

S それはなんか分かるような気がするな。

H それから、鈴人間で、シーソー、光と影、ブランコ、ヒモ。(図3、4) 全体に共通する関心っていうのはなんでしょうか？ なんとなく全体を通して参加すると分かる気もするんですけど、何なんですかね、あえて言葉で言うと。



図3 シーソー

図4 ブランコ

S まずは参加した側としてはどうですか。

K うーん、光と影の時とかはほとんど散歩しただけじゃないですか。その回に限らないんですけど、ゴーヤとかもそうですし。鈴も、鈴の音がいいなと思うことはよくありますけど、鈴がどっかで鳴ってたらすごく気持ちいいとかあるんですけど、踊るっていうか、自分が動いたりして、鈴の音を楽しむのと、なんかいいなって。何もせずにぼーっと座って、良くなって思ってるのとなんか違うんだなって、さっき話してて思いました。植物も見てて動いてるのを面白い動きだなとほんやり思うことはあると思うんですけど、それと実際にじっと手を当ててみたり、植物の動きを真似してみたりして、植物をいいなって思うのと、なんか違うんだなって。それが、テーマだったかどうかは知らないんですけど、僕はそれを結構ずっと楽しんでました。

H それって人間のからだを考えると面白いですよ。動きを見るっていうのは、ある移動を見るだけじゃなくて。今窓から車が見えてますけど、車が移動するっていうのは多分車から見た景色がどんな様子かっていうのも感じながら見てたりするわけですよ。だか

ら動きを見ているときには、たぶん離れていても一緒に動いてるっていうそういう要素があるんじゃないですかね。だから単に木の葉が揺れてるっていうのと、木の葉のように揺れてみる、木の葉のように揺れながら木を見てみるっていうのと、だいぶ違う、違うっていうか、違わないんでしょうけど、なにかが倍増されるっていうか。ダンスって見ていったい何が楽しいのかなって思うんですけど、実際私も自分でからだを動かしてみて気づいたのは、単に見てるよりも自分でからだを動かした方が百倍面白い、ってことでした。でもそうすると見るのもすごく、実はまたその百倍楽しくなった。今までジャワ舞踊とかも長年見てきましたけど、実はあんまり楽しみ方が分からなくて、強いて言えば綺麗だなとしか思ってなかったんです。でも自分で動くことを学び始めると、ああもっとああいう風に動きたいとかいろいろこちらに欲望が付いて回って、しかも見てるだけで自分が動いた気にもなってくる。自分のからだの動くイメージと目の前で展開するイメージがちゃんとリンクして、場合によっては連動するみたいな。でもなんでそれは動いてみないとわかんないんですかね。私はジャワ舞踊なんかもう20年以上も見ているんですけど。

S ジャワ舞踊を20年くらいやってますけど、不思議と飽きなくて、飽きないどころかいろんな発見が次から次へとあって。そのなかの一つに、揺れるということが踊りのなかですごく大事だなということがある。揺れてるときに、からだのなかの液体が揺れている感覚というのがあって。それは、水のように揺れましようとか、風に吹かれる木のように揺れましよう、とか僕も言ったりするんだけど、もっとなんか直接的な感覚で、本当に水、水っていうよりもっとドロツとしたようなイメージですけど、自分のからだのなかで実際にそういうものが動いているのを感じるんですよ。それをやっぱりなんか、実際にやって見たいなという欲望はすごくあって。植物のように揺れるんだったら、植物を持ちながら揺れてみようよとか、実際の木と一緒に揺れてみようよとか、あるいは天井から紐をぶら下げてその先に重りを付けてそれを揺らして、その重りと一緒に揺れてみようよとか、あるいはその重り自体になってみようよとか。なんかそういうことを試してみたいというのはすごくあって。それをするとなんか変わるんじゃないかなあと。

H 何が変わるんですか？見た目が変わる？

S 見た目も変わるし、それは比喻じゃないよ、と言いたい。何かみたいに揺れる、という比喻じゃなくて、本当に揺れてるんだよ、と。からだのなかのいろんなものが。それを味わおうという感じ。あと、とくにシーソーとか影とかになると、作為と無作為というところと、またちょっと別の絡み方をしてくるのかもしれないけれども、思わず動いてしまうからだというのも、自分のなかにテーマとしてあるんです。例えば天井からぶら下がった紐

の先の重りのように、とか、重りになって揺れてみるということはもちろんあるんだけど、生身の人間だと思わず動いてしまうというところがあって、そこがまた更に面白みだと思うし、逆に言うと決まりきった既製の振り付けとか、ジャワ舞踊もそうなんですけど、決まった振り付けを覚えて練習するのは別のダンスの始まりみたいのがあるだろうと。そっちの方も僕としてはすごく気になるんです。

例えばシーソー、あの時はシーソーを作りました。平らな板の真ん中に塩化ビニルのパイプを付けて、それを椅子に渡して即席のシーソーを作ったんですけど、結構しっかりとしたシーソーができました。年配で長髪の男性の方が来られて僕とシーソーの上に立たれました。シーソーなんかだと、別に何にも言わなくてもバランスを取りたくなるみたいなのがあるんです、なぜか。じっと探る感じがあって、これより向こうに行ったら傾く、いやまだ大丈夫、という探る感じが、勝手に自分のからだから出てきて、もうすぐで釣り合うってところまで来ると、すごく楽しくなってくるんです。そこまで来ると相手のからだからすごく感じられてきます。木の先にある相手のからだのちょっとした動きとか存在がすごく感じられてきます。自分とつながるっていう感じです。何かのポイントにグッと近づいていくところに向けて人間のからだ動き出すところが、すごく面白い。

H それってやっぱり首を持って立たせるのと同じ話ですよ。使っている物質はだいぶ違いますけど。人のからだに力を加えてある状態に持って行こうとする、つまり立たせる場合とシーソーとは見かけは随分違います。シーソーの場合、純粹に力学的な均衡に見えます。でも、からだとかからだ一致して動かないと立つことも、バランスをとることもできない。一つのからだになるというか。

S でもモチベーションのところはちょっと違うのかなという気もするんです、立たせるのとシーソーに関しては。感じる力としたらすごく似たところもあるのですが。例えば、ペットボトルを頭に載せるのもよくワークショップでやるんですが、大概のときは何も言わなくても頭に載せ始める人がいて、載せるとすごく落とすたくなるんですよ。しかもそれが5分10分と載せ続けると本当に頭の一部分みたいになってきて、ますます落とすたくなるみたいな感じがあって。そのために、落とさないためにからだを操作し始める自分がある、そういうのが僕はすごく面白いと思うんですよ。あと手と手なんかでも誰かと触れ合うと、ある時間が経過するとやっぱり、パッと離し難くなってくるんですね。指先までググッときてもうこれ以上行ったら離れる、というところになるとやっぱりちょっと止まってしまう訳ですよ。で、離すにしても付いたままにしても、なんか粘りみたいな感じが出てきて、そういう感覚をからだに呼び起すものは一体なんなんだろうという感じもするし、そういう時に出てくるからだの動きはおもしろいなと。

さっき菊竹さんがツルに巻かれたときは、別にパッと普段の力でやれば離れられるんだけど、相手と同じくらいの力の強さになってしまうというか、そこでちょっとこう、綱引きしてるみたいな感じになって、相手とのバランスを楽しみだしてる感じもあったと思うんです。そうするともう、この力から逃れられなくなってくる、みたいな。それは面白いといえば面白いし、恐ろしいといえば恐ろしいような気がします。ものすごい恐怖にも感じるんだけど、何か人間の面白さみたいなものも感じます。そういうことからダンスを作れたりしないのかな、って思ってるんです。

シーソーなんか、すごく均衡を作りたくなる部分と、均衡ができたならちょっと外したくなる部分もあるんですよ。ちょっと前とか後ろとかに移動して、フワッと上がってまたグッと下に戻したくなる。永久にバランスを取ってるよりも。ああいうのも、すごく不思議なんですけども、面白いなと思うんですよ。そういうことがだいぶ今年見つけてきたし、そんなことをいろいろ使って、何かできないかなと。この何かできる、ということろまでには大きなステップがあるような気もするんだけど。今年も色々いっぱい発見があったので、僕としては非常に楽しかった。

H やっぱり単なる力学的な均衡状態と、からだがバランスを取ったり外したりして揺れるのとは違うんだと思います。今、話していてひとつ疑問に浮かんだのは、対鈴とか対人間とか、モノを介して対人間とか、紐を介して対人間とか、一見離れてるものがつながる装置みたいなものをうまく使ってる気がします。それはなんて言ったらいいのかな。でもそれは結局道具の話で、今の手をつないだら簡単に離せないみたいなのは、相手が人間であろうとものであろうと、生き物であろうと。紐もそうですよね。紐を振っていたら、紐が生き物に見えてきて紐と一緒に動きたくなる。連動し続けたい。一旦結ばれた連動の動きというのは簡単にはやめられないっていうのは、そこに何かがある気がします。なにかそれは、欲望の世界っていう感じがする。向こう側の欲望と、こちらの欲望が一旦蔓のように絡んでしまったら、簡単には解きたくない。

S 欲望とかね、執着とか、快感とかね。快感ていうのもけっこうあるかな、という気がする。シーソーとか快感ですよ。

4. ヒモダンス

S 紐ダンス（図5、6）のときに、一つきっかけとなったのは、滋賀県立大学の細間さんの紹介する障害のある人が、紐好きの人が居て、一日の大半を紐とともに過ごして、その紐を

振る、と。自由自在に振ると。場合によっては何十メートルも、50メートルくらいの紐だったら自由自在に振るといふ様な話があつて。それを見ている人も思わず見とれてしまうような見事な紐捌き、みたいな、そういう文章があつて。まあ前から紐は気になってたけども、一回紐でやってみようかなと。まあやっていた中に何種類か違うことをやったと思うんですけど。最初は多分紐を振るようなことをやったかな。



図5 ヒモダンス



図6 ヒモダンス

K 紐を二人で引っ張り合つた人もいたし、紐を投げる、遠くへ投げていた人もいました。

S 遠くへ投げるのは、いろんな種類の紐でね、細い紐とか、ちょっとロープみたいなやつとか、途中僕が布みたいなのを放つたりしたんだけど。あと本間さんなんかは棒の先に紐をつけて新体操みたいにくるくる回したりしてましたけど。菊竹さんは何やりました？

K 僕も一通りいま言ったことはやりましたよ。どれも楽しかったです。布を投げるのが面白かったですね。

S あれ、ジャワのサンプルって布で、幅が40cmくらいで、長さはまあ3mちょっとくらいあると思うんですけど、それを振るといふか投げたり、引っ張つて元に戻したり、みたいなのを結構やりましたね。何でその布のやつが面白かったですか？

K なんか、佐久間さんが他の人がやっているのを見て、もうちょっと布が落ちるまで引き戻すのを我慢してみたいな、ことを言つて、確かに動きを見たら、解るんですよ。我慢できてる動きとそうでない動きって。それで伸びが全然違うんですけど。で、いざやってみ

て頑張っって我慢しようとしてもできない、みたいな。できるだけほんとに我慢しようとするんですけど、ここで引っ込めちゃうみたいな部分があって、そのせめぎあいできるだけ我慢しようとしつつも戻してしまう、みたいな。その境界をちょっとずつ。

S その3mくらいの布の一端をもって投げるみたいにする。紐がパーッと前に伸びて行って、その先端が床につくまで待って、つきそうになるまで、先端が伸びきるまで待って、クッと引き上げると戻って来るんだけど、まあそこまで行く前に引っ張っちゃうと紐の動きが少しもどかしいみたいな感じになるんですけど。また逆に待ちすぎると紐が足らんとした感じに落ちちゃって、べつに落ちたらダメと言う約束事も何もないんだけど、落ちてもやや残念な感じがあって、床に触れるか触れないかくらい、ちょっと触れてもいいと思うんだけど、その重み自体が床につくんじゃなくて、紐が生きているみたいスッと戻ってくる感じに行く気持ちがいいというところもあって。僕なんかもやっている時に、まあ例えばルアーフィッシングしているみたいな感じで、あの目的物をパッとカメレオンの舌でキャッチする、あるいは鞭で何メートルか先のものに巻きつけて取り上げるみたいな感じで、自分でコントロールできる感じで投げれると、楽しいっちゃ楽しい。その時のどういう感覚でするとそういう感じになって来るのかっていうのがあって。その布が床に触れるかどうかというのを目でキャッチするっていうのもあるし、からだの感覚で重みが全部向こうにいったっていう感じなのか、あるいは逆にその後の紐の動きをキャッチしているのかもしれないね。だからまあ、仮に先まで言っていない時に引き上げると、引き上げて戻ってくる前でまだ向こうにいくエネルギーとこっちへ引くエネルギーが相殺するっていうかな。引っ張っているのにまだ紐は向こうに行きたがるのが残ってて、さらに自分はすでにもう引いているものだから、また今度前に行く動きが早くやって来ると。すると今度はやっとなんか戻ってきた紐がさらに自分の後ろの方に戻っているよりも、自分が前に行きたがっていると、さらに紐と動きがずれてきて、どんどん紐が真ん中に集まって来るっていうか。一回二回三回とやるうちに紐の動きが相殺してきて、真ん中に集まって来るっていうのを手が感じてるというかな。多分一回ごとに重みが全部前に行くっていうのは結構感じるのは難しいと思う。でもただ一回二回三回とやった時に上手くいっていない感じっていうのは解る感じがする。それを瞬時にフィードバックしながらクッと行ってフッと戻ってくる時の見た目とかいうものを感じる。また自分の後ろに行く、後ろに行くからあんまり見ないんだけど、また前に振り出した時の戻ってくる感じっていうのを、瞬時にフィードバックというかな、感覚と見た目と、繰り返しごとに変化みたいなものを感じながらやっているんじゃないかなと思う。やっている最中にもそれちょっと疑問に思っって。見なかったらどうなるかなと思っって。見なかったらやっぱり難しいわけよ。ちょっと紐の動きも見ながら、手の紐の伝わってくる重みみたいなものも感じながら、まあ両方かなとおもいながらやっってたね。

K 今、聴いていて不思議だなと思ったのは、確かに良くわかるんですけど、そうだとすると、自分のからだ自体はあんまり感じる対象にはなっていないんでしょうか？

S 自分で自分のからだの動きを感じる、紐でなくて。

K 手首をこのくらいの速さでやればうまくいくみたいには考えていなくて、紐の方に意識が行っているんですかね？

S そこもすごい面白くて、紐とか長い布のときだと、僕のイメージとしては、カメレオンの舌とか鞭とかみたいに、わりと目標物に対してヒュッとまっすぐと紐を向かわせるときは、手を大きく振るんじゃなくて自分の目の横くらいからピュッと紐がまっすぐ飛んでいくというのをイメージして自分の腕も大きく振りかぶるんじゃなくて、なるべく目の横くらいで、大きく手を振らずに小さい振りで目の横のあたりを行ったり来たり戻ったりするぐらいの感じですとまあうまくいくんじゃないかな、という自分のイメージはありますね。まあそうでなくても多分できると思うんだけど。僕自身が野球のボールなんかを投げている時に似たようなイメージがあって、コントロールをつけて投げるときにそういう投げ方を自分でするんですよ。球を早く投げるというよりも、ほんとに相手のミットめがけて自分の手から線が伸びていって、自分の指先と相手のミットの間線が見えて、そこにボールがその線上を通過して投げれるような感覚を持つるときがあって、その感覚が自分の中に残ってて。それを布の時も思い出してやってたという感じはありますね。ほんとに線が見えるとそこに球が追いかけていくみたいな感じの。

まあ布とか紐もいろんな振り回し方があるし、新体操みたいな感じもあれば、釣りの投げるときのような感じがあったり、いろんな感じの投げ方があると思うんだけど。まあ僕自身野球のボールを投げるのが割と得意だったから、そのイメージが残ってたかなと思うんだけど。さっき菊竹さんが言ったみたいに、手の感覚はどうなんですか、っていう質問あったんだけど。からだの動きを自分でコントロールするっていうか、いろんな動きを作っていくときに、まあダンスの時もそうなんですけど、自分のからだ、骨とか筋肉とか、自分のからだをコントロールしてあるかたちを作ったり、あるリズムを作ったり、あるフォームを作っていくときもあるし、むしろちょっと違う感じで、例えばビデオカメラを構えてそのカメラがぶれないようにからだをコントロールして、膝を上手く使って腰を上手く使って、そのカメラがぶれないようにするために、からだを動かさない、ぶれないということに集中して、からだをそこに合わせていく。頭の位置があまりぶれないように動く、というのを、頭を意識して歩いていく。でもそのうちにある程度からだの動きも定まってくると、からだの動きも気を配って、頭がぶれないように。で、今度は頭がぶれないように、だけをより集中してか

らだはそこに合わせていく、というその往復をしながら動きを作っていくというのがあって。自分のからだだけを考えるよりも、フツといい動きがうまれるときがあるんですよ。

紐の動きなんかもそういうところがあって、紐を動くうごかしてやろうということに集中していくとそこに良い動きが生まれてきたりするんじゃないかなあと思って。あのときに本間さんが、いつもあんまり動かない本間さんが嬉々として紐を振り出して。すごい綺麗にやっぱり紐が踊るんですよ。で、凄いはしゃいでやってるんだけど、すぐ疲れるんですよ。本間さんはすぐ疲れるから、それをどうしようとか言って、今度は棒の先に紐をつけて、「これだったら楽です」とか言って。それでまた嬉々としてやり出すと、凄い紐が綺麗に動き出して。本当に新体操の紐のように動き出して。更に嬉々としてわーっとやりだして、ほんとに紐が綺麗な曲線を動き出して、やっている時に、富田さんが「うわー」とか言いだして。富田さんが見ていたのは、少し長い紐の最後の何十センチかのところが炎の先のように自由な動きになってるんですよ。揺らめいているっていうか。ずっとその棒から紐がつながってずっと来ているところは軌跡がある程度安定しているし、例えば八の字を書くなら八の字をきれいにたどっているわけね。蛇みたいなによるよるっていう動きをするとき綺麗な曲線を描いて、それが連続することによって、綺麗な曲線を創り出している。本当は静止しているものでもないからね。順番に軌跡をたどっているんだけど、それがずっと軌跡をたどっているから線に見えてくる。その線上に紐が通っているように見えるんだけど、最後の最後だけそれが乱れるんですよ。

で、なんか炎のようでもあるし、僕はちょっとアニメの動きのようにも見えたんだけど。なんかちょっと意志をもって動いているっていうか。そこだけがちょっと生きものっていうか。何かのアニメに似ていると思った。ディズニーとかの、日本のアニメじゃなくて、昔みたような。わからないけど、ウッドベッカーとかトムとジェリーとか、大昔のアニメの何かでみたような、止まっている猫がピュッと追いかけたときに煙みたいなのが残るみtainの。そういう感じ。最後のところがちょっといきいきとしてんだけどね。それが本当にこっち行ったりこっち行ったりして最後にちょろろんと。で、ちょっと戻ったりするわけよね。こう行っているはずなのに、こっち側にも回り込んで。そっちに行くのかみtainな。猫のしっぽ見たいとかなんというか。まわりついてくるみtainな。それがすごい綺麗で、それに富田さんがすごい興奮して、おもしろいと。一緒に見てて面白いなと見てましたね。

S ということをやったりしてて、僕としては50mの紐をうごかすというのも気になってて、50mっていうのはすごいなあと思うんだけど。でもまあ釣りとかだったらね、海釣りとかだったら凄い距離投げるわけですよ。100mとかもっと投げるのかな。なんかすごい距離だったと思いますよ。だから人間の生身の力でも50m、60m先まで力が及ぶっていうのはあり得るし。例えばその紐が点からぶら下がってたとして、凄い上の方から真下にぶら下

がってたとしたら、下からぐるぐる一ってやるとまあ50mくらい別に全然動くと思うんですよね。真上に上がってたら。あるいは地面から出た杭に紐が1mなら1mの高さで結わえられたとして、その反対側を持ちながらずっと歩いてによろよろしながら振るとか、縄跳びの感じで動かしてたら、力は一体何m先くらいまでできるんだろう。これ以上先まで行ったら紐がベタッと地面に寝ちゃって、いくら振っても振りが途中で砂漠にしみこむ水のように、どうやっても杭のところまで届かないみたいになるのか。かなりぎゅーーっと引っ張りながらやれば、なにがしかの自分の力が届き得るのか、それ凄くやってみみたい気がして。このあいだは室内でやったから出来なかったんだけど、それをまたやりたいなと思うんですけど。

で、あの時にもっと紐と紐とで綱引きみたいに引っ張り合うっていうのもやったんだけど。僕がはまったというか面白かったのは、ズボンのベルト通すわっかのところにパンツの紐みたいな平べったい長いゴムの紐をくくってつけて、反対側の端っこもまたベルト通しのわっかのところにくくって、くくった人通しが背中を向け合って、徐々に離れていって張力がだんだんかかってきて最終的には紐が伸びきるみたいな位置関係で、お互い紐を、紐をというか、力を感じながら、後ろ向きで立ってる。すごい楽しかったですねあれは。で、ゴムの張力もあるし、相手に引っ張られてる感じっていうのが、なんかすごい情報量っていうか。なんかいろんなメッセージが伝わってくるんですよ。その紐を通してね。単に軽く引っ張ってる、弱く引っ張ってる、あるいは緩むっていうだけじゃなくて、方向性とかリズムとかいろんなことが伝わってくるんですね。それが面白くて、しばらく後ろ向きにやっていると凄いらんなことが伝わってきて、場合によっては相手の感情みたいなものもちょっと伝わってきて、「何やってんのやろ」と思わず振り向いてみたくなるみたいな。「何をやったらこんな力になるんやろ」と思って何回か振り向いたくらい面白かった。それやったよね菊竹さん。

K やりました。面白かったですね。それが腰のたった一点っていうのが面白いですよ。背中合わせでお互いもたれるというのもやったことありますけど、それで相手の感情がわかるみたいな話は、まあたくさん触れているからからわかってもおかしくなさそうですけど、たった一点でもたくさんわかるっていうのはすごいですよね。

S そうですね。ちょっとあれ不思議な感じでしたよね。

K 距離の感じ方っていうのもちょっと不思議でしたよね。引っ張りあっていて、距離があるのかなのかわからない。力は直ぐ伝わってくるから直に接しているようでもあるし、でもやっぱり距離を感じるような気もするし。

S あの時一番遠い感じだと、オレンジショップの端から端だから10m以上離れてた感じよね。でも情報量は減ったっていう感じはしなかったよね。例えば1mでやるのと比べて10mやったからその分情報が減ったかっていうと、そういう感じはしなくて。まあ増えたとは言わないけども、ありありと遠方から伝わってくる何かの情報が伝わってきた感じがして、それも不思議だし、背中であんなに触れているんだから、というのと比べると、10mも離れているのにどうしてこんなにわかるんだ、っていう不思議さとか面白さとか、そういうのはあったかもね。

手と手を引っ張るのもやりました？多分シーソーの時とかにもやりましたけど。あれと似ているといえば似ているんだけど。あれはどう思いました？最近僕結構はまってるんですけど。バランスをとってみたいとか、グーッと自分の方に体重を預けてみたい、あるいは背中を丸めてやると腕のところからずっと腰のへんまでつながったものが引っ張られている感じがしたり。あるいはグーッと背中をのぼしていくと、自分の重心とかからだかどっちに傾いているかとか、自分のそういうことがすごく意識されたりとか。あるいは相手が凄い腕に力入ってて、肩から先だけが感じられるとか。相手がすごく、自分側、僕の方から遠い側に体重を預けるのをすごく戸惑っているとか。あ、今足元が滑りそうになってるとか、いろんな情報が伝わって、特に相手の腕より先までつながった部分の感覚が一つのラインになっているようなところが面白かったり。あともものすごく気持ちいいのよあれ。からだのいろんな部分が伸びるっていうか。引っ張られて。それは例えば柱とか鉄棒とかを持ってからだを預けても、近いことは起こるんだけど、その時には起こらないような気もするからね。まあ背筋伸ばし機みたいなのも気持ちいいんだけど、それ以上にもっと気持ちいいみたいな。

K ちょっとだけ違うことですけど、引っ張ったまま相手を振り回すみたいなことやりました。そしたらさっきの話じゃないですけど、もし相手が死体だったら僕だけ動くじゃないですか。でも生きてるから引っ張ると、相手は遠心力に任せてたたっと歩いちゃって、それが面白くて。その人の遠心力の感じ具合とかもわかるし、体重とか、自分のことだけでもない相手のことだけでもない、その間のものがある。自分と相手がどういう関係にあるのかみたいなことがダイレクトにわかるような。

S 今言っているのは、手をつかみ合って、例えば右手と右手だと方向が反対方向になるよね。例えば時計回りなら時計回りで回転する動きが生まれてくるんだけど。お互いがぐーっと外へ体重をかけていくと、そこでつり合いみたいなのが取れてきて、お互い前を向いているもんだから、ぐるぐる回転し始める。するとセンターラインみたいのができてくる。ぐるぐる回転していると、センターで動く場合もあるんだけど、例えば僕の方が中心となって相手がぐるぐるとまわりをまわる場合もある。それでどんどん加速していく場合もあるんだ

けど、時としてしばらく回ったらそれがゆるまって、ある地点から「はい、私がセンター」みたいな形でセンターを移す時があるわけよね。その時にやっぱり何かやり取りがあるのよね。ぐるぐる回って、「受け取った、今度はこっちがセンターよ」という感じが伝わってきて、そうするとそっちがセンターになる。あの時もなんかゆるめてはい、そっちへわたす、っていうのは面白いやり取りですね。やっぱりなんか物理的な人形とか機械とかおもりとか紐とかでは無い人間とのやりとりみたいな感じで。楽しくてどんどんやると最後は大体こけてしまうんですけど。

まああれもすごいシンプルなことだし、よくやること、子供のときもよくやったし。よくやることなんだけど、でも改めてやると面白いね。

K 「自分がセンターになるよ」みたいに考えるときもあるだろうけど、それだとわりと意志みたいな感じですけど、それだけじゃなくて片方が疲れて力がたまたまゆるんだりとか、それを引き継いじゃうみたいな、メッセージとはいっても、色々ありますよね。

S それは、やってる側は凄くよくわかって、入れ替わるとか、相手の感じが伝わるっていうの。でも見ている時に発見とか、見え方みたいなありました？

K それがそういう風に見ようとしたときに見えるかというのは別として、あんまりそういう風に見ていなかったような気がして。紐を引っ張りあっていて、体重を片方が倒してもう一方が引っ張られるようなときでも、ひっばっている方が力をかけているのでそっちが主導しているという言い方は出来なくはないですけど、別にそういう風に見ていない。それが上手くいっているというか、自然にいつている時は、もうちょっと一体として見ているような気がして。どちらが主導しているな、っていうのが自然と見えちゃうときは、バランスがうまくいっていない時の方が見えるような気もして。紐を縦に揺らしてウェーブを作っていくときに、波が変になっちゃうときは、片方がすごい不意打ちしたりしてそれに相手がうまく乗れなかったみたいな時の方が、波が乱れて見えたような気がするんですよ。

S そのうまくいっている時の一方的ではない二人の感じっていうのは、見ている側には色々。シーソーの時に僕と長髪の初老の人がやってたの覚えてないですか？　すごい達人っぽい感じの。シーソーの時に富田さんが、やっている時に、見ている時じゃなくて自分がやっている時に、「あ、きたきたきたきた！」とかいうんですよ。シーソーの両端に乗っている時に、あるところまでは「きたきたきた」という感じがして、かなり探り合ってきたどこから先に富田さんの言うところの「きた」というところがあって、一段階テンションが上がるところがあって。(図7) そこに入ってくるとよりクッと集中して、相手との微妙な

やりとりが始まって、ここから先はほんとに咳ひとつでどっちへ転ぶか分からない、そういう段階に入っていくところがあって。わくわくするわけなんですけど。でもそこは見てても、「アッ来てるな」とか「今お互い同志がそれを感じている」と、「そういうところに今入っていったな」というのは見ていてもわかると。さっきの僕と長髪の人がやっているのも、達人どうしが高度3000mくらいで超能力のやり取りをしているみたいにも見えるわけよ。シーソーがなかったら。それは二人の入り具合がそういう風に見えるんだと思うのよ。「あっゾーンに入っている」みたいな。雲の上に行って「おぬしもやるな」みたいな感じで「次はどういう技を出してくるのか」みたいな。そういう感じが本人が「きたきたきたきた」というのもあるし、それがまた見ている人にもそういうのが見えるっていうのがあって、面白いなあっていうのと。もう一個はシーソーってそういうシビアーなシーソーもあれば、子供の時の長いシーソーだと意外と簡単に合うじゃないですか。で、結構止まったりする、ある安定で。そうすると今度は崩したくなる。そこもおもしろいと思うんですよね。合わせたいのか崩したいのかどっちなのか、というところがあって。すごく合わせたくなるところと、あっているものを崩したくなる場所があって。紐のやつなんかでも、お互いで気を合わせて図形を作ったりきれいに回したりしている内に、それを崩したくなるっていう衝動が生まれたりするってこともあるし、そういうタイプの人もあるわけ。それをすごくやりたくなるタイプの人。まあ僕はどっちの気持ちもわかるけど。でも僕は結構快樂的だから、合わせていくところの気持ちよさにある程度、身を、むさぼるように楽しみたい、みたいに続けることが多いと思うけど。ずらす時もあるかもしれない。



図7 きたきたきたきた！

5. からだから遠く

H 感覚を味わい尽くし、それを周りの人や環境と響かせ合うことができれば、それだけでダンスになりますか？

S ダンスとダンス作品はちがう…

H どうちがうのでしょうか？

S ダンス作品というと、例えば、コンテンポラリーダンスの作品群のなかの一作品というようになってしまう。そう思うと、作品ということに囚われない方がいいかもしれない。

H ではからだトークは、ダンスではあっても、あえてダンス作品を目指さなくてもいいですか？

S からだトークは、ダンスの境界や可能性を探っている人たちのやっていることと重なったり響き合うところはある。こういう風にすれば作品になる、ということにこだわるよりは、いろんなダンスがある、と言うことが大切じゃないか、と思います。

H 誰に向かって言うのですか？

S いろんな人に。これもダンス、あれもダンスだ、と言いたい。

H 日々のなかでダンスとは何だと思えますか？

S からだが反応するとか、喜ぶとか、そのときはすでに私たちはダンスしている。

H たぶんそうなんですよね。でも、そうでなく見えさせている何かが私たちの日常に働いていて、からだトークの時間では私たちはそれから解き放たれているのでしょうか。菊竹さんはどうですか？日々のなかでのダンスとは？

K はじめて自分で、踊りがひとりでできると感じれたのがついこの間のことです。ハワイ

に行って、強い波に揺られて、あとでもその波の感覚が残っていて、その感覚のまま揺れられたときに、いままで頑張って揺れようとしていたときよりも、ずっといい動きをしたように感じました。それは、からだを周りに開いておくことだと思いました。その感覚を感じずに直立しておくこともできるけど、開いておくこともできる。

H 面白いですね。ふだん、私たちはからだを使っていながら、そのからだを感じることを疎かにしているし、今度はそれを感じようとする、かえって物体としての不器用なからだに閉じ込められてしまう。でも、からだの遠心力と求心力の両方が感じられるとき、私たちは身も心もダンスをしているのでしょうか。それはやっけても、見ていると純粋に楽しいし、美しい。存在のダンスとでもいうのでしょうか。